

国際日本研究学位プログラム（博士前期課程）

Master's Program in International and Advanced Japanese Studies

- 修士（国際日本研究）
- Master of Arts in International and Advanced Japanese Studies

人材養成目的 / Program Educational Objectives

21世紀の世界は、人口減少や高齢化、経済格差、環境危機、民主主義の変容といった社会的課題に加え、言語や文化の多様化、異文化理解の必要性といった文化的課題にも直面している。日本もまた、多文化共生やデジタル化による社会変動に向き合う中で、その経験は国際社会にとって重要な比較対象となっている。こうした状況は、日本を国際的文脈に位置づけ直し、比較研究を通じて世界の課題解決に資する知を創出することを求めている。

本学位プログラムは、人文科学・社会科学・日本語教育学を融合させた学際的研究を通じて、日本語・日本文化の発展と国際的発信に貢献できる研究者および高度専門人材を養成する。文学・言語・歴史・思想の人文的知見、社会科学的分析、日本語教育学の実践的研究を統合することで、日本語・日本文化の価値を刷新し、普遍的知見を国際社会に発信する。世界各地から集う多様な学生とともに学ぶことで、国境や専門分野を越えて活躍できる「知日派」人材を輩出し、持続可能で包摂的な多文化共生社会の構築に寄与する。

養成する人材像	グローバルな視点から現代日本の特質を解明するために、幅広い専門的知識と俯瞰的な視座を涵養し、その基礎的素養と関連領域の学修を通じて、研究職をめざして後期課程に進学し得る能力を有する人材。
修了後の進路	博士後期課程への進学。それ以外に、国際関係組織、日本語教育機関、情報メディア産業、日本やアジアをマーケットとする製造業や商社、金融機関などの民間企業。

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する博士前期課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（国際日本研究）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てようとしている意欲があるか ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見し、解決策を提案できるか	大学院共通科目、修士論文合同演習、研究法入門、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、講義科目、修士論文作成、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①国際日本研究分野に関連する課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	大学院共通科目、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、達成度自己点検、インターンシップ科目、外部コンテスト等への参加、修士論文作成、中間発表等
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	大学院共通科目、修士論文合同演習、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、演習科目、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	大学院共通科目、演習科目、インターンシップ科目、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問等
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意欲があるか ②国際的な活動に必要な語学力を有するか	大学院共通科目（国際性養成科目群）、人文社会科学のためのグラントライティング入門、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、外国語の講義科目、外国語の演習科目、外国語文献を利用した修士論文作成、外国語による中間発表、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC 得点、国際会議発表、外国人との共同研究等

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 研究力：国際日本研究分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力	①国際日本研究分野における研究課題を設定する能力を身につけたか ②国際日本研究分野における研究計画を遂行する能力を身につけたか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、研究法入門、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、演習科目、修士論文作成、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	7. 専門知識：国際日本研究分野における高度な専門知識と運用能力	①国際日本研究分野における専門知識を身につけたか ②国際日本研究分野における専門知識の運用能力を身につけたか	学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習等の専門基礎科目、日本社会と家 1 などの専門科目、演習科目、修士論文作成、中間発表、研究会発表、学会発表、ポスター発表等
	8. 倫理観：国際日本研究分野の基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識	①国際日本研究分野において必要な倫理観を身につけたか ②国際日本研究分野において必要な倫理的知識を身につけたか	大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、学術院共通専門基盤科目、研究法入門、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、演習科目、研究指導、修士論文、中間発表、INFOSS 情報倫理、APRIN e-learning 等
学修成果の評価に関する方針	<p>学修成果の評価は「達成度評価表」に基づく達成度評価によって以下の段階毎に学位授与の方針に基づくコンピテンスの修得状況を客観的に確認し評価する。達成度評価の段階・方法を以下に示す。</p> <p>本学位プログラムでは、「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」に掲げる知識・能力（コンピテンス）の修得状況を的確に把握し、学修成果の評価と教育指導に反映させるための仕組みを整えている。具体的には、学生による「コンピテンスシート」の記入を学期ごとに実施し、各コンピテンスに関連づけられた修得単位の進捗や、学修の到達状況を振り返る機会を設けている。提出されたシートには事務室による確認とコメントが加えられた後、担当教員と学生との間でレビューを行い、修了までに確実に達成できる見通しを立て、教員からの所見にをカリキュラム委員会で確認し、最終的にはコンピテンススコア到達状況は、各自の学位論文審査委員会が論文審査時に審査することで、学修支援と学習計画の調整に役立てている。このプロセスを通じて各コンピテンス領域ごとの修得状況を数値化し、進捗のバランスを図表（レーダーチャート等）により可視化している。これにより、学生自身が今後の履修や学修の重点を把握しやすくなり、計画的・主体的な学びの促進につながっている。</p>		

<p>学位論文に関する評価の基準</p>	<p>(審査体制)</p> <p>(1) 専門委員会委員（審査専門委員）のうち、少なくとも主査1人（研究指導）と副査2人（研究指導または授業担当）の合計3人は、当該審査研究群教員会議の構成員から指名するものとし、主査1人と副査の半数以上は、人文社会科学研究群（博士前期課程）国際日本研究学位プログラム教育会議の構成員から指名するものとする。</p> <p>(2) 人文社会科学研究群（博士前期課程）国際日本研究学位プログラムに所属する審査専門委員のうち少なくとも1人は、博士の学位を有する者であるものとする。</p> <p>(3) 人文社会科学研究群（博士前期課程）国際日本研究学位プログラムに所属する審査専門委員のうち少なくとも1人は、審査専門委員会解散後引き続き1年以上にわたって国際日本研究学位プログラム（博士前期課程）教育会議構成員の研究指導担当教員であるものとする。</p> <p>(4) 本学教員で学術院・研究群の授業担当教員でない場合にも、当該学位論文審査に不可欠であると認定される場合には、その者を審査専門委員会の副査に加えることができる。</p> <p>(5) 当該学位論文審査専門委員会に不可欠であると認定される場合には、本学の他の学術院・研究群等、他大学の大学院又は他の研究所等の教員等を審査専門委員会の副査に加えることができる。</p> <p>(評価項目)</p> <p>学位論文の審査は次の項目に基づいて行っていること</p> <p>① 課題の設定が適切であること</p> <p>② 論旨が明確であり、かつ一貫性を有していること</p> <p>③ 正確な用語を用いて適切な分析を行っていること</p> <p>④ 先行研究の成果を十分に把握していること</p> <p>⑤ 文献・資料を適切に使用していること</p> <p>⑥ 体裁及び構成が適切であること</p> <p>⑦ 相応の学術的貢献が認められること</p> <p>(評価基準)</p> <p>上記の評価項目すべてを満たす学位申請論文を、審査を経た上で、合格とする。</p>
-----------------------------	--

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

(人文社会ビジネス学術院人文社会研究群に属する国際日本研究学位プログラムは、) 人文科学・社会科学・日本語教育学を架橋する学際的研究を基盤とし、研究力・専門知識・倫理観を涵養するとともに、人文社会科学の基礎的素養、ビジネスを含む幅広い視野、社会の多様な場で活躍するための汎用的知識・能力を育成する教育・研究指導を行う。

<p>教育課程の編成方針</p>	<p>学生の主たる研究関心を軸として、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、大学院共通科目または学術院共通専門基盤科目から1単位、研究群共通科目のうち「修士論文合同演習」、「研究法入門」または「Academic Writing and Research Ethics」の2単位を必修とする。研究指導においては、複眼的視野をもった研究能力の育成のために複数指導体制（必要に応じて他学位プログラムの教員も参画）とする。具体的な履修科目や副指導教員の配置は、個々の学生の研究計画やキャリアプラン等を踏まえて決定する。</p>
-------------------------	--

<p>教育課程の 編成方針</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 大学院共通科目、修士論文合同演習、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、リサーチ・プログラム開発、修士論文作成、学会発表などにより、高度な知識を社会に役立てる能力（1. 知の活用力）を身に付ける。 - 大学院共通科目、人文社会科学のためのインターンシップ（1）（2）、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、達成度自己点検、外部コンテスト等への参加などにより、広い視野に立ち課題に的確に対応する能力（2. マネジメント能力）を身に付ける。 - 大学院共通科目、修士論文合同演習、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、学会発表などにより、専門知識を的確に分かり易く伝える能力（3. コミュニケーション能力）を身に付ける。 - 大学院共通科目、人文社会科学のためのインターンシップ（1）（2）、TA 経験、チームでのコンテスト参加、学会での質問、セミナーでの質問などにより、チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力（4. チームワーク力）を身に付ける。 - 大学院共通科目、人文社会科学のためのグラントライティング入門、国際日本研究のための日本語、国際日本研究のための英語、国外での活動経験、留学生との交流、TOEIC、国際会議発表、外国人との共同研究などにより、国際社会に貢献する意識（5. 国際性）を身に付ける。 - 学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics、プロジェクト演習 1A、1B、2A、2B、2C、2D、専門科目（演習科目）、修士論文作成、研究会発表などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野における研究課題設定と研究計画を遂行するための基礎的な知識と能力（6. 研究力）を身に付ける。 - 学術院共通専門基盤科目、修士論文合同演習、専門基礎科目、専門科目（講義科目、演習科目）、リサーチ・プログラム開発、修士論文作成、研究会発表などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野における高度な専門知識と運用能力（7. 専知識）を身に付ける。 - 大学院共通科目（生命・環境・研究倫理科目群）、学術院共通専門基盤科目、研究法入門または Academic Writing and Research Ethics、専門科目（演習科目）、研究指導などにより、人文社会科学分野及び国際日本研究分野の基礎的研究能力を有する人材にふさわしい倫理観と倫理的知識（8. 倫理観）を身に付ける。
-----------------------	--

<p>学修の方法 特色的な教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 基礎科目：「研究法入門」または「Academic Writing and Research Ethics」では、研究倫理・情報倫理の基礎、国際日本研究分野の研究の特質を学ぶ。「大学院共通科目」や「学術院共通基盤科目」で研究に資する幅広い視野を修得する。 - 専門基礎科目：「国際日本研究のための日本語」「国際日本研究のための英語」においては、日本語（非母語）や英語を使った研究に必要な知識やスキルを身につける。他の専門基礎科目においては、学際的な人文科学、社会科学、日本語教育学の各ディシプリンの基礎を系統的に学ぶとともに、人文科学と社会科学の融合を目指す複合研究によって特定のディシプリンにとらわれない幅広い視野や問題意識を涵養する。また演習科目では、院生は各科目において専門の基礎的知識に根ざした議論や発表、分析等を学び実践する。 - 専門科目：「プロジェクト演習」においては、学生が研究プロジェクトの構想・研究過程・成果を発表し、教員や他の学生との議論を行う。「リサーチ・プログラム開発」では、学会発表、研究交流、学術的な社会貢献などの学生の自主的な研究活動を支援する。他の専門科目においては、学際的な人文科学、社会科学、日本語教育学の各ディシプリンを系統的に学ぶとともに、特定のディシプリンにとらわれない幅広い視野や問題意識を深化させる。また演習科目では、学生は各科目において専門知識に根ざした議論や発表、分析等を学び実践する。 - 8つのコンピテンスそれぞれについて修得基準を設け、1年次終了までに基準の6割以上、2年次前半終了までに基準の8割以上、2年次終了時に基準を満たすことを目指して学修する。修得基準は学生に対して別途提示する。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 知の活用力 2. マネジメント能力 3. コミュニケーション能力 4. チームワーク力 5. 国際性 6. 研究力 7. 専門知識 8. 倫理観
--------------------------------	---

入学者受入れの方針 / Admission Policy

<p>求める人材</p>	<p>国際的かつ比較研究の視野のもとで日本の文化・社会や日本語教育を研究し、その成果を活かして、日本や東アジアを中心に世界が直面する課題に主体的に取り組む意欲をもつ人材を求める。前期課程では、こうした課題に対し、基礎的な研究者としての素養を培おうとする者、あるいは職業人として実践的に取り組もうとする者を、学生・社会人を問わず広く受け入れる。</p>
---------------------	---

<p>入学者選抜方針</p>	<p>入学者の選抜にあたっては、一般入試、推薦入試、社会人特別選抜などの入学者選抜方式によって多様な入学志願者に対応するとともに、募集人員を分割し、同一年度に複数回の入学試験を実施する。また、入学機会を4月だけではなく、10月にも提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 一般入試では、専門科目及び外国語の筆記試験、並びに口述試験を実施し、総合的に判定する。専門科目は、国際日本研究に関する「政治」「経済」「文学・文化・思想」「法律・社会・メディア・情報」「言語学」「日本語教育学」の分野から1つ出願時に選択した科目について日本語または英語（「日本語教育学」は日本語のみ）で解答させ、博士前期課程において国際日本研究を遂行しうる能力、研究しようとしている分野の専門的知識を判定する。外国語の筆記試験は、国際日本研究に必要な外国語運用能力を判定する。口述試験は、研究計画書等を参考とし、学修成果や思考力、研究に対する情熱・意欲、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力も判定する。 - 推薦入試では、小論文の筆記試験、及び口述試験を実施し、総合的に判定する。推薦入試は、学士課程等において志願者を指導し、その諸能力や性格、資質などを知悉する教員から国際日本研究に必要な専門的知識や研究遂行能力、外国語運用能力をすでに身につけているとして推薦された者を対象としている。また、受験者は、学士の学位を取得しているか、取得予定であるため、専門科目や外国語の筆記試験は行わず、小論文により、専門分野に関する知識、理解力、論理的思考能力等、博士前期課程において国際日本研究を遂行しうる専門的能力を判定する。口述試験は、研究計画書や推薦書等を参考とし、国際日本研究に真摯に取り組む意欲、研究計画、本学位プログラムを志望する理由、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力や語学力を含むコミュニケーション能力も判定する。 - 社会人特別選抜では、専門科目の筆記試験及び口述試験を実施する。社会人特別選抜は、社会人としての経験を有している者を対象としている。専門科目は、国際日本研究に関する「政治」「経済」「文学・文化・思想」「法律・社会・メディア・情報」「言語学」「日本語教育学」の分野から1つ出願時に選択した科目について日本語または英語（「日本語教育学」は日本語のみ）で解答させ、国際日本研究を遂行しうる専門的能力を判定する。口述試験は、研究計画や社会人として得られた問題意識、研究しようとしている分野の専門的知識に加え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力なども判定する。
-----------------------	--

学修支援体制 / Learning Support Framework

<p>学修支援</p>	<p>本学位プログラムでは、学生が効果的に研究を進め、その成果を学内外に発信できるよう、さまざまな学修支援を実施する。</p> <p>学会発表にかかる旅費の支援制度を整備し、国内外の学会での発表機会を積極的に提供することで、学生の研究活動を広く社会と接続するための環境を整えている。</p> <p>また、指導教員の助言のもと、学会発表を見据えた発表資料の作成や発表練習を通じて、自らの研究を他者にわかりやすく伝える力を涵養しており、これらは「リサーチ・プログラム開発」の科目として位置づけられている。</p> <p>さらに、必修科目である「国際日本研究のための日本語／英語」においては、論文執筆や学術的プレゼンテーションの指導を行い、アカデミックスキルの基礎力育成にも力を入れている。</p>
--------------------	--

<p>学修支援</p>	<p>こうした支援を通じて、学生は研究成果を的確かつ効果的に発信する力のみならず、異なる文化的・社会的背景をもつ人々と学術的成果を共有し、対話を通じて新たな価値を創出する能力を身につけていく。</p>
<p>学生同士の交流機会</p>	<p>本学位プログラムでは、学生同士の主体的な交流を促進することにより、学修意欲や研究の質の向上を図っている。その一環として、教員と学生が一同に会する全体集会では、修士課程に在籍する学生が、自身の学修や研究活動、留学・インターンシップ等の経験を互いに共有する機会を設けている。これにより、異なる背景や専門性をもつ学生間での相互理解や刺激が生まれ、学際的な視点の育成にもつながっている。</p> <p>また、修士論文執筆に取り組む学生を支援するために、秋学期に修了生や執筆経験のある在学生による「修士論文執筆ミニ経験談」を実施しており、構想段階から提出・口述試験に至るまでの実践的なアドバイスを共有している。こうしたピア・サポートにより、執筆に対する不安の軽減とともに、学び合いの環境づくりが促進されている。このように、学生同士の知見と経験を循環させる交流の場を通じて、相互啓発の機会を提供し、より高い水準での研究遂行を支えている。</p>
<p>教員との交流機会</p>	<p>学生と教員の円滑なコミュニケーションを通じて、学修意欲の喚起や研究の質の向上を図るための環境整備に努めている。全体集会では、教員と学生が一堂に会し、日頃の研究や学修に関する意見交換を行う機会を設けており、学生の声を教育運営に反映させる仕組みづくりを進めている。</p> <p>また、学生を対象としたアンケート調査を実施し、学位プログラムへの要望や意見を収集するとともに、その結果については全体集会において教員側からフィードバックを公開する機会を設けている。これにより、教育環境の改善や相互理解の促進が図られている。</p> <p>さらに、教員によるキャリア支援にも力を入れており、進学・就職・研究職への道を含めた多様なキャリア情報の提供や、個別相談を通じて、学生一人ひとりの進路に応じたサポートを行っている。</p> <p>このように、教員との継続的な対話の機会を通じて、学生の主体的な学びと将来設計を支える体制を整えている。</p>

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

本学位プログラムでは、教育の質を継続的に保証し、改善していくための体制と取り組みを整えている。FD委員会を設置し、教育活動全体に対する点検と改善を継続的に実施することで、教育の質を保証し、学位プログラムの目的達成に向けた体制を強化する。具体的には、教員間での定期的なFD活動を通じて、授業内容や指導方法、カリキュラム構成等に関する情報交換を行い、プログラム全体としての教育内容の検討・見直しを図っている。また、授業評価アンケートの結果をもとに、学生から寄せられた意見を受け止め、必要に応じて授業方法の改善や内容の再構成を行うなど、教育の質の向上に向け、柔軟かつ継続的に対応している。